

<前回>オリエンテーション**1. 近代の思想状況と自然神学****2. 自然神学の新しい動向**

2-1 : 自然神学とコミュニケーション合理性 5/28, 6/4, 6/11

2-2 : クレイトンと脳神経科学 6/25

2-3 : マクグラスと伝統特殊的合理性、意味論 7/2

3. 形而上学批判と形而上学再構築

3-1 : ハイデッガーと解釈学 7/9, 7/16

3-2 : ホワイトヘッドとプロセス神学 7/23

Exkurs

人文学の新しい可能性——キリスト教学の視点より

科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より 5/21

<前回>モルトマンと科学技術論**(0) モルトマン神学の位置**

1. ユルゲン・モルトマン『わが足を広きところに——モルトマン自伝』新教出版社。

第一期：1926-1964、 第二期：1964-1980、 第三期：1980-

2. 森田雄三郎「現代神学の動向」（1987年）

「モルトマンの最初の三部作『希望の神学』、『十字架につけられた神』（一九七二年）、『霊の力における教会』（一九七五年）を読むとき、われわれはブロッホのみならず（たとい多くの言及がなされずとも）アドルノ、ハバーマスといったフランクフルト学派のいわゆる「批判的理論」の社会哲学の主張がいたるところで考慮されていることに気づくことであろう。しかし、この三部作は、その後出版された『三一神と神の国』（一九八〇年）によれば、なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまることを、モルトマン自身が表明している。この書以後の彼の著作を見ると、直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である。したがって、ごく最近のモルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上での一つの重要な焦点をなすとも言えよう。」(41-42)

(1) モルトマンと科学技術

3. 『神学の展望——現代社会におけるキリスト教の課題』（1968）

・「11 希望と計画」（1966）

「キリスト教的希望は、未来を宿命的にタブー視してはならない。それはまた、神信仰の助けをかりて未来を放棄することができるなどと考えてはならない。」(333)

4. 「12 近代科学の世界における神学」（1966）

「神学と自然科学」「互いに関連なく並行して、もはや何も言うべきことがない発言の葛藤喪失状態の中にある」「互いに意味なく並行している状態」(335)、「神学と科学とは、伝承と自己自身の経験との間の葛藤という形になってきた」(336)、「精神神学と自然科学との間の溝」(337)、「現代の科学は、現代の技術の可能性と解きがたくしっかりと結びついている。それはさらに社会全体の巨大科学と国家的計画によってなされるべき投資にかかっている。このような投資は、かかる企画によって人間を尊重する生の未来がも定められるかぎりにおいてのみ、意味深いものとなる。ここに政治と社会全体と人が考慮すべき未来のヴィジョンとが、相互依存の関係にあることが分かる」、「純粋な客観性を越えて

新しい倫理を求める責任が成長してきた」(356)、「絶えざる対話においてのみ、一方科学の力と他方意味を与える人類の希望の未来の目標とが、両者お互いに媒介しあうことができる」(359)

5. 『科学と知恵——自然科学と神学の対話』(2002)

「IX 人間の倫理と生化学的進歩の道徳性(エトス)」(1971)

「ウイルスおよびバクテリア性感染症の克服」「無菌世界というヴィジョン」、「向精神薬の発達」「痛みなき世界」、「臓器移植技術」「交換可能な身体」、「新しい優生学」、「このような人間の関心・希望・ヴィジョンに基づいて、生化学の進歩そのものが、人類の偉大な倫理的企画となります」(187)

「人間性の倫理が必要であり、苦痛の医学的緩和や病気の追放だけででなく、人間的な受け入れや、苦痛・病気・死を意識的に自分のものとなること、これらにも目をとめなければなりません。からだの秩序が人間的人格の秩序と統合されねばならないように、生医学の進歩もまた、人間性の秩序の中に統合されねばならないのです」(205)

(2) モルトマンと自然神学

6. 『創造における神』(1985. Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungeslehre)

・自然神学：ストア哲学に由来。経験によって知ることができる自然ではなく、事物の本質の認識→自然=創造とよばれる現実(有限で依存的で偶然な)。

・創造と聖書に由来する二重の神認識。

不完全であるが「自然の光」に照らされて、「自然という書物」からの神認識：良心の内なる証しによる神の先天的認識(notitia insita)と、自然認識から得られた神認識とからなる。

・救済論的方法での分類：楽園における神認識の「残余」、痕跡、想起。

・自然神学と啓示神学との関係：啓示神学の準備、確認、目標、代用、競争、敵としての自然神学。

(1) 教育的機能

(2) 解釈学的機能

(3) 終末論的機能：栄光における神認識の先取り。

痕跡は同時に到来する栄光の反映。被造世界として世界を認識することは、この世界を将来の世界の譬えとして隠喩的に認識することである。自然的神認識はこのような機能において聖霊論に属している。

・二つの相違する神学があるのではなく、ただ一つの神学がある。この一つの神学はさまざまな条件と時代的制約下にある。自然神学は自然の国の条件における一つの神学。啓示神学は恩寵の国における一つの神学(十字架の神学、メシア的神学、旅人の神学)。栄光の神学は、栄光の国における一つの神学である。そのつど後に続く神学の形態が先立つ神学の形態を摂取している。啓示神学は歴史という条件下での自然神学。

7. 『神学的思考の諸経験』(1999. Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie)

・「I 神学とは何か」「第六節 自然神学」(神学的実存・神学者、「歴史神学」「キリスト教神学」)

キリスト教神学の前提としての自然神学／キリスト教神学の目標としての自然神学／キリスト教神学自体が真の自然神学である／キリスト教神学の課題としての自然神学

・キリスト教神学の課題→「共通の場」「共同作業」のための自然神学

「今日キリスト教神学は」「被造物の神学」は、現代の新しい生態学的危機と挑戦に立

S. Ashina

ち向かわなければならぬ」(115-116)、「自然科学と科学技術との共同作業のために、私たちは、「自然神学」の理解の枠組みを必要としている」(116)

「様々な宗教共同体が、宗教多元的社会と地球的規模に広げられた世界において、共に生きていくに応じて、これらの宗教共同体は、そうでなければ表現できない、それらのもろもろの差異を表現できる、共通の場所を見出すであろう」(117)

「宗教性は世俗性と同様に、共通のいのちに奉仕しなければならない」

「神学、哲学と政治学が今日求めている普遍的概念は、疑いもなく宇宙である」、「私たちが知るだけでなく体験している相対的宇宙は、地球のシステムである」、「相対的に全体であり具体的に全世界」、「私たちは、大地の経済と大地の政治 (E・v・ヴァイツゼッカー)、そして「大地の宗教」へ向かうであろう。「自然神学」の神学的部門にとって、この文脈は、「自然の神学」(Theologie der Natur)が「大地の宗教」を受け入れ、言語で明瞭に表現しなければならないことを意味している」、「地が神のために祝う「地の安息日」への畏敬の念である」、「大地の神学」(118)

Exkurs:

現代日本における人文学の課題

—キリスト教研究の視点から—

<内容>

1. はじめに
2. 伝統の変容と再建
3. 人文学の役割
4. おわりに

1. はじめに

1. 現代日本の現実、大学を取り巻く状況

変化を起こしている二つのファクター

- ・ 科学技術・市場原理：教育の市場化
- ・ 大震災：急激な変化への対応・存在意味

この双方が合わさると、大学の実学志向という従来からの路線の強化となる。

2. 大学の動向

大きな変動を先取りした急激な改革

京都大学の場合：教養教育・一般教育の半分を英語にする（英語の教員 100 名雇用）、博士課程教育リーディングプログラムの実施、学部を基礎単位とした従来の人事制度と教員組織（学部自治）の改変、事務組織の大規模な集約化。あらゆるレベル・部門で大きな変化が起きつつある。よくもわるくも、10 年後に、日本の大学は大きく変貌しているのではないか。

3. この状況下での人文学・人文科学の役割

これが、本日のシンポジウムのテーマ

- ・ 伝統的な人文学：哲学、歴史、文学。

この伝統的な人文学は、教養市民社会から大衆社会への変動の中で、どのような新しい在り方（新人文主義）を構築すべきなのか。

- ・ 結論を先取りして言えば、伝統・伝承の保存と現代への批判的視点の提供（危機を批

判的に分析すること)。この二つの課題は相互に関連し合っている。

4. 矢野智司 (教育哲学・教育人間学)「序論：倫理への問いと大学の使命」

京都大学連続公開シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」(2007-2009年、4回)が開催され、その報告書が出版された。

・「共同体としての大学の衰弱」「大学は専門家を育成する「専門家の教育」の場にとどまらない」、「教養教育はこの「市民の教育」と「人間の教育」という異なる2つの次元の教育につながっている」(ii)、「理想主義やヒューマニズムに代わる教養教育の理念がなかったのだ」(iii)、「大学は資金というレベルにとどまらず、組織運営から教員管理に至るまで市場経済に組み込まれつつある。」(iv)

「共同体の精一としての責任ある市民を育成する」、「共同体の枠組みを超え生命世界に生きる」

・「市場交換に還元できない「研究」と「教育」、「真理への献身」(iv)、「次の世代に無償に「教える」という贈与のリレーが継承されていく。」(v)

等価交換としての教育は教育を崩壊させる (内田樹『下流志向』の主張)。

2. 伝統の変容と再建

5. 大震災において顕在化した現実、加速化しつつある現実

この事態を宗教という観点から見た場合、特に顕著なこと、死を巡る儀礼システムが機能できない現場。大量の死・戦場と化した安置所、葬儀も火葬も間に合わないのもかくも土葬。家族・身近な人の死を受け止めきれない多くの人々。

喪の技法・死の了解(生の了解)の喪失。が改めて浮き彫りになった。現代社会は死を病院内に押し込め目立たないようにしてきたが、それは死と向き合い、それに対処する知恵をも失わせたのではなかったか。その背後にあるもの。

近代化のプロセスの促進＝伝統の変容・コミュニティの崩壊と知的世界の解体
東アジアの共通状況。宗教・家族の変貌と死者儀礼の変化。

韓国の場合：この30年の間で。土葬から火葬へ。

震災以前から無縁社会として問題化した事態がさらに深刻化しつつある。

6. 宗教が果たしてきた役割、死あるいは死後の問いが空転しつつある。

7. 近代以降のキリスト教

ジョン・ヒック(1922-2012。宗教哲学者・神学者)：「基本的にキリスト教は、天国、または地獄経由の天国における未来の復活の生命を断言する。そして時には地獄の辺土、また現代では地獄に代わる絶滅が、これに加わる。」(219)

「しかし近代世界では、そしてもっとも保守的なキリスト教徒を除けば、永遠の地獄は神話のなかに消え失せている。天国も同様に消え去っている。もはや天使たちが神の玉座の前で讃美歌を歌うことはない。」(220)

伝統を掘り崩してここまで来た。伝統が文化内部で保持されていたかぎりでは、問題は顕在化せずすんだ。しかし、

↓

8. 再構築の必要性、

自前で死も生も支えきれないにもかかわらず、これまで技法が崩壊し、新しい技法もいまだ存在しない。そのために、人文学はいかなる役割を果たしうるか。知の保存と批判、これによって再構築を助ける。

たとえば、注目すべき、人文学の動向として。

S. Ashina

死生学（thanatology）の新しい試み。東京大学の 21 世紀 COE において死生学が取り上げられたことなどから始まって、死生学は大きな広がりを見せている（歴史学から学際的な研究へ）。これは、大震災とも関わりをもってきている。

- ・「グローバル COE プログラム 死生学の展開と組織化」:

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>

- ・日本臨床死生学会：<http://www.jsct.org/>

- ・ルーテル学院大学大学院附属・包括的臨床死生学研究所:

<http://www.luther.ac.jp/guide/affiliate/thanatology/>

- ・東北大学の文学研究科実践宗教学寄附講座：臨床宗教師の育成

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html>

- ・東洋英和女学院大学・死生学研究所:

<http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigakuin/shiseigaku/index.html>

- ・東北大学死生学研究会：<http://www.sal.tohoku.ac.jp/rinshiken/diary.cgi>

- ・明治大学死生学・基礎文化研究所

http://www.meiji.ac.jp/research/promote/specific_subject/dtl_tokutei_2012_0084.html

- ・早稲田大学・臨床死生学研究所

http://www.kikou.waseda.ac.jp/WSD322_open.php?KikoId=01&KenkyujoId=5X&kbn=0

3. 人文学の役割

9. 「キリスト教学」とは、いかなる学問か。

京都大学のキリスト教学は、伝統的な人文学の学問の枠組みの中での、キリスト教を専門的に研究教育する分野・講座として発足し、現在に至っている。しかし、キリスト教学とは、神学と哲学を有する伝統的な西欧の大学・学問システムとはややずれた性格を有しており（境界領域・中間分野。武藤一雄先生の言い方を借りれば、「神学と宗教哲学との間」）、発足当初より、その学問的位置づけをめぐる反省がなされてきた。

- ・芦名定道「キリスト教学の理念とその諸問題」、

日本基督教学会北海道支部『「キリスト教学」再考』（日本基督教学会北海道支部公開シンポジウムの記録）、2009 年 3 月、pp.52-71。

- ・芦名定道「キリスト教学の可能性——伝統とポストモダンのとの間で」、

日本基督教学会『日本の神学』49、2010 年 9 月、pp.252-256。

10. 日本のキリスト教研究の場合：記憶・知の保存と批判の必要性。

プロテスタント宣教から 150 年が経過した。太平洋戦後でも、ほぼ 70 年。

昭和初期から太平洋戦争期の困難な時代の資料が散逸し忘却されつつある。あの時代の日本キリスト教についての歴史的事実を保存するぎりぎりのところにある。同じことは、2 年前の大震災と津波、原発事故に関しても起きる可能性がある。生きた歴史として保持し伝承する努力が必要である。

生きられた歴史の保持には、過去への批判的視点が必要であり、それは現代への批判とならざるを得ない。過去を解体する現代とは何か。天災をさらに悲惨な人災としたものが何だったのか、何であるのか。科学技術・市場原理を突き放し対象化する必要がある。しかしもちろん、ここに困難がある。

11. 記憶の忘却に抗しつつ記憶を保持し共有する試み→キリスト教研究の役割

12. 大学以前に修道院が果たした役割。IT 技術はこの役割を新しい形で果たす可能性を与えてくれた(?)。

- ・開かれた図書館
- ・出版・流通の簡易化・容易化による知の共有と創造性の促進。

大学は新しい知的センターとなり得るか

知のグローバルなネットワークとローカルなネットワーク。

世界の中の大学

地域の中の大学

13. 世界教会協議会（WCC）とスイスジュネーブに拠点を置くさまざまな専門家、組織、個人による倫理的視点や洞察を共有することを促進するグローバルネットワーク

Globethics.net がオンライン神学図書館「GlobeTheoLib」を開設してから1年が経過した。

<http://www.globethics.net/gtl>

14. 科学技術（者）が自らの営みの責任性を自覚しつつある。地震防災の専門家は、きわめて稀なリスクに対しても人々に知らせる必要があるとの意識が高まってきている。

科学技術自体が哲学的要素を内在させている。人文学の役割はこの内在する哲学的要素を主題化し自覚化できるように取り出し、保持することにある。

15. ジャンニ・ヴァッティモ（1936-。イタリアの哲学者。ヨーロッパ議会の議員）

「哲学には「素人でもやれる仕事ではないか」という疑いがつねにつきまとっている。これがこの職種を不安定にしている。『ヨーロッパ的諸科学の危機』の問題、すなわち、精神の生の全体との関係のなかでみずからの専門性を維持するという問題は、どの職業にも付随的には存在しているにしても、哲学においては構造的な問題なのだ。」（121）

「西洋ではテクノロジーの発達はデモクラシーの発達と分かちがたく結びついていた。ところが日本人が電子工学技術を自分のものにしながらデモクラシーは自分のものにしなかつたでしょう。そのときには本来の意味での哲学的な問題が提起されるのである。」（124）

文化・文明という統一体と哲学 → 人文学の位置

人文学の中でも得意な位置をしめる「哲学」は、批判的知の伝統の中心をなしており、それは人文学全体のなかで人文学を活性化する役割を担っている（現実はこの理想からはかなり遠いようにも思われるが。これが課題として意識されるかされないかは決定的な違いとなる）。

4. おわりに

16. 新しい人文学への期待

- ・教養市民向けの近代西欧の人文主義からの転換も必要か。
- ・近代の貴重な遺産である人権思想や民主主義が解体しつつある現代日本の中で。

<参考文献>

1. 位田隆一・片井修・水谷雅彦・矢野智司編『倫理への問いと大学の使命』京都大学出版会、2010年。
2. ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』法政大学出版局、2011年。
3. 芦名定道「韓国キリスト教の死者儀礼」（『東アジアの支社の行方と葬儀』勉誠出版、2009年）。
4. ジョン・ヒック『人はいかに神と出会うか』法蔵館、2011年。